中野重治と天皇制
――視点と構造について――

木　村　幸　雄

一

中野重治は，現代作家のなかで，最もはげしく天皇と天皇制とにこだわりつづけ，それをしばしば作品に描き，評論でも論じてきた文学者である。明治天皇の死と大葬とが，民衆にどう受けとめられたか，それを自伝的長編小説『梨の花』のなかに描いている。そして，大正天皇の死と大葬とが，労働運動の弾圧に，いかに政治的に利用されたかは，『むらぎも』のなかに描かれている。また，昭和天皇の即位の大典には，有名な詩『雨の降る品川駅』と小説『鉄の話』を発表している。さらに，敗戦をふまえて，天皇と天皇制をどうするか，それが日本の民族道徳樹立の根本問題だと，『五勺の酒』で提起している。現天皇の立太子礼の際には，『その身につきまとう』という小説で，天皇制につきまとう陰惨さ，残酷さ，頽廃を深くえぐっている。評論まであげれば，『天皇と戦後犯罪責任』，『道徳と天皇』，『天皇制その銭金の面』などきりがない。これほど執拗に天皇と天皇制とにこだわりつづけた文学者は，他に例を見ない。

そこで，中野重治と天皇・天皇制の問題もしばしばとりあげられてきている。新しいところでは，江藤淳氏が，『昭和の文人』[1]のなかで，中野重治と天皇の問題を中心にすえて論じている。江藤氏によれば，『雨の降る品川駅』は，「自国の君主に対する『叛逆』の歌にほかならない。「『日本天皇』の正統的な臣民以外のものではあり得ない」詩人中野重治が，朝鮮人と一体となって「日本天皇」に対する「報復」を呼びかけることは，「傲慢」と「偽善」におちいっていたのだという。さらに，江藤氏は，中野重治を，日本天皇に対する「裏切り」と「忠誠」という論旨の軸に沿って裁断して行く。――詩人中野重治が，その本然に立ち返ろうとすれば，そこに現れるのは〝村の家〟と，「日本天皇」の正統的な臣民という自己の姿のみであり，転向は，まさにその本然の自己の姿に立ち返る機会であった。にもかかわらず，中野重治は，『村の家』において，父に対する「二重の裏切り」を犯している。「転向」で父の信頼を裏切ったうえに，転向後の生き方について父の忠告を拒否するという「二重の裏切り」である。ところが，その中野重治も，「実はいつの間にか完全に転向し，日本と『日本天皇』への忠誠を，抑制することのできない人間に戻っていたのではないか。」というのが，江藤氏の論旨の眼目である。その証拠として，『五勺の酒』をあげ，主人公の心情に託して吐露されている主題は，「天皇に対する同情，いや愛情以外のなにものでもない」と断定している。つまり，江藤氏のねらいは，一般に左翼文学者，反天皇主義者と見なされてきたほかならぬ中野重治が，実は天皇に対する反逆・裏切りから「転向」へ，そして天皇への「忠誠」へというコースを辿ったのだというふうに論じ，日本天皇に対する「忠誠」を強調するところにある。

これらの江藤淳氏の言説は，大変刺激的であり，挑発的でもある。しかし，刺激的，挑発的になればなるほど，その言説は，日本天皇に対する「正統的な臣民」の忠誠心の復活へと傾斜して行く最近の江藤氏自身の主観的な心情一色に染めあげられ，いかがわしいものに変質しているのではなかろうか。そこで，中野重治が，天皇と天皇制とをどのようにとらえ，描いて来ているのか，あらためてふりかえってみておきたい。

二

まず，中野重治の天皇と天皇制とにかかわる言説には，さまざまな視点が含まれていることに注目したい。それらは，実際には複雑にからまり合って現れているのだが，基本的に分類すれば三つに分けられる。すなわち，生活・経験的な視点，人間・倫理的な視点，歴史・政治的な視点の三つである。そして，視点が違えば，当然天皇・天皇制のとらえ方にも，さまざまな差異が生じてくる。

その差異を無視して，中野重治の天皇・天皇制にかかわる多面的で多様な言説を一色に塗りつぶしてはなるまい。

第一の生活・経験的な視点というのは，天皇・天皇制を，いわば民衆生活の底辺から経験的にとらえて描く視点である。それは，論理や思想以前の土俗的な生活習慣や民衆の混沌とした内面の心情にまで深く喰い込んでいる天皇・天皇制の陰影をこまやかに見とどけようとする視点である。『梨の花』のなかには，そういう視点からとらえられた天皇と天皇制の陰影と，それに対する民衆の反応とがいくつも描き込まれている。主人公の村の少年の視点に，そういう視点が託されている。その視点から，皇太子の行啓，日韓合併における天皇と皇族の役割，明治天皇の死と大葬のことなどが，印象的に描かれている。それらを，生活のなかのこまごまとした具体的な事柄や場面と結びつけ，少年の経験を通して描いている。

たとえば，少年が，天皇や皇族の犯すべからざる「神聖」について意識させられるのは，便所の落し紙のことからである。便所で落し紙に使う新聞紙に，天子様，皇太子殿下，皇孫殿下 ── 皇室関係の写真が出ているところは，破って取っておけ，もったいないから，と祖父から注意されることで，そのことを意識に植えつけられる。ここでの天子様は明治天皇，皇太子殿下は大正天皇，皇孫殿下は昭和天皇に当たる。少年は，一方では，皇孫殿下とは学校が同学年ということで，素樸な同級生意識もいだくようになる。そういう少年の眼から，皇太子の行啓のことが，その準備のことから当日の歓迎行事のことまで詳しく描かれている。村人たちや学校の教師と生徒たちの反応がこまごまと書き込まれている。祖母は，「ものい(物憂い) こっちゃれ……」，「ものいりじゃがいして……」と庶民的な生活実感をもらす。先生は，東京の子供でもなかなか拝めない「東宮殿下」を拝めるのだから勉強せよと教える。

つぎに，明治天皇の死と大葬に際しての少年とその祖父の反応が，少年の眼から眺められ，克明に描かれている。

「良平……」といって良平は起こされた，「十時じゃぞ。十時じゃ。起きて拝みないの……」良平は起きて寝莫蓙の上へきちんと坐った。おじさんもきちんと坐っている。

「東京の方向はこっちかいな。」

良平はそれは知らない。しかし東の方ではあるのだろう。おじさんは東向きになっているのだから，知ってはいるがただ良平に訊いてみたのだろう。

そのとき「どおうン……」という号砲の音がした。皇太子殿下の行啓のときのように，やっぱり花火屋の永村のおじさんがお天守でうったのだろう。それに続いていくつもお寺の鐘が鳴ってきた。大歳(おおどし)の晩のように鳴ってくる。ただどの鐘も一つきだけでやんだ。(2)

これは，少年と祖父が，大葬に際し，明治天皇の棺が，宮城を出る時刻を知らせる号砲や鐘の音に合わせて，その方角に向かって跪づき，拝んでいる場面である。そして，少年は，今全国民が同じように宮城の方角に向かって跪づき，拝んでいると思っている。そう思いながら，眼の前の祖父の様子を見守っている。

おじさんが鼻をすする。おじさんは両手を脇へついてお辞儀をしている。

良平も東向きでお辞儀をする。おじさんの手が，いつものように，親指を中へ入れて，四本の指を曲げたまま外がわへ張り出すようにしているのが良平の眼につく。あんなやり方は良平らはしない。

ほんのしばらくそうしていて良平は顔を上げた。おじさんも上げている。

「天子でも王様でも，人身をうけたからには死なにゃならんのじゃ……」

おじさんのは独り言で，そう自分でいっておじさんはまた鼻をすするようにする。

「それ，おもんみれば，人間はただデンコウチョウロの，ゆめまぼろしのあいだのたのしみぞかし。たといまた，エイグワエイヨウにふけりて，思うさまのことなりというとも，それはただ五十年ないし百年のうちのことなり……」

またおじさんの癖がはじまったなと良平は思う。あんなこと，いわねやいいにと思う。蚊帳の外に，燃えうつらぬように少し離して燭台が立ててある。その灯で，たるんだ蚊帳のあちこちの破れを白の木綿糸でしばってあるのがわかる。そのなかで，頭のすぐ上までれ垂た蚊帳の天井の下で，両手をあんな風につっぱって，ち

ょっと前かがみ加減で独りぶつぶついっているおじさんは人がみたら気味を悪がることだろう。良平は知っているから気味わるくはないが，いつもの朝のお参りとちがって，本を持たずに宙で読んでいるのがなお気味がわるい。おじさんは肌子一枚でまだ「御文章」――「御文章」だろうと思う。――を続けている。あまり聞いたことのない「御文章」だ。

「それはただ五十年ないし百年のうちのことなり。もしただ今も，無常のかぜ来りてさそいなば，いかなる病苦にあいてかむなしくなりなんや。まことに死せんときは，かねてたのみおきつる妻子も財宝も，わが身にはひとつも相そうこともあるべからず。されば死出の山路のすえ，さんずの大河をばただひとりこそ行きなんずれ。これによってただ深くねがうべきは後生なり……」

「やっぱしおじさんは『異安心』なんじゃろうな……」と良平は思う。天皇陛下は，葬式は仏法の方ではやらぬはずだ。神主さんの方でやるのだろう。おじさんの話では，天皇陛下でも何でも仏法の方へ持って行ってしまう。

「またたのむべきは弥陀如来なり。信心けつじょうして，まいるべきはアンニョウの浄土なりと思うべきなり……」

良平は，あんなことをいって，おじさんは悪いことになりはせぬかとも思ってくる。皇后陛下や皇太子殿下は，「妻子」というのとは少しちがっているだろう。天皇陛下が死になさって，いつかの皇太子殿下が天皇陛下になった。それといっしょに皇孫殿下が皇太子殿下になりなさったのだろう。皇孫殿下は三人あるが，一ばん上が皇太子殿下になる。あれは良平らとは同し五年生のはずだ。ただ同し五年生とはいっても良平の方が一つ小さい。良平は早生まれだからだが，その皇孫殿下でも「妻子」というのとはやはりちがっているだろう。おじさんが――そこまではわからぬが――天皇陛下が「エイグワエイヨウ」をしていたり，宝ものをたくさん持っていたりしたように取っているらしいのも良平と感じがちがう。良平には，天皇陛下がぜいたくしていたとは思えない。死んでから行きなるところも，「アンニョウの浄土」とはちがうとしか思えない。何にせそれはアマテラスオオミカミの方だ。アミダ如来とは宗旨がちがうはずだ……。

ここで，少年は，蓮如の「御文章」――「白骨の御文」を宙で唱えながら明治天皇の死を哀悼している祖父に，一種気味の悪い異和感をおぼえながら，その姿を見守っている。祖父の姿は，土着的な前近代的な意識において天皇制をささえてきた日本の民衆の暗い姿を彷彿させ，すでに近代的な学校制度のなかで，新しい天皇主義の教育を受けてきている少年の眼には，ことごとに異様に映る。しかし，その異和感は，差異として意識されるが，それが対立とか否定とかに発展することはない。むしろ，祖父の意識の古層の上に，少年の意識の新層がつみ重ねられ，差異の堆積を通じて天皇主義思想が生きのびて行く構造がうかがわれるのではなかろうか。少年の意識は，学校教育によって染められたものだが，祖父の信仰は実生活の経験によって裏打ちされている。

「うららは……」とまだおじさんはぶつぶついっている。良平は目をつぶっている。返事はしない。

「御恩にはなってるさかい。何というたって，ゴイッシンまでとはすっぱり変ったがい……」

おばばも始終そういっていたが，この「ゴイッシン」というのが良平にはよくわからない。明治「維新」のことを「イッシン」となまって，それに「御」の字をつけて「ゴイッシン」というのだろうか。

良平の祖父は，明治天皇の「御維新」に，一農民として「御恩」を感じているのだが，こういう場面では，天皇・天皇制が，明らかに生活・経験に密着する視点からとらえられ，描かれている。そして，それは中野重治自身の経験と記憶によって裏打ちされている。したがって，描写のすみずみにまで実感がこもっている。

つぎに，第二の視点として，人間・倫理的な視点がある。これは，戦後，中野重治が，『道徳と天皇』において提起し，『五勺の酒』へと発展させた独自の視点である。すなわち，天皇と天皇制の問題を，日本の民族道徳樹立の根本問題として追求する視点である。

『道徳と天皇』では，昭和21年元旦の天皇のいわゆる「人間宣言」が，「神」としてふるまってきた

それまでの戦争責任に一言もふれていない欺瞞性を鋭くつき，「天皇は贋金つくりの王」であり，「国民道徳の腐敗源である」と厳しく糾弾している。そして，『五勺の酒』では，「問題は天皇制と天皇個人との問題だ。天皇制廃止と民族道徳樹立との関係だ。あるいは天皇その人の人間的救済の問題だ。」と，天皇制廃止と民族道徳樹立とを不可分の関係にあるものとしてとらえている。そのなかに，「天皇その人の人間的救済の問題」をも含めてとらえている。

もちろん，『五勺の酒』は小説であり，主人公の見解がそのまま作者中野重治の見解とみなすわけにはいかないが，主人公の篤実な中学校長は，中野重治好みの人物であり，彼が述べる天皇と天皇制とに関するユニークな言説に，作者の切実な問題意識が現れているとみることは許されるであろう。さきの『道徳と天皇』という評論には，筆者の憤怒がストレートに噴出しているが，『五勺の酒』の主人公は，むしろ腰を落して，自分の教師としての戦争責任を反省し，戦後の青少年の精神のすこやかな成長・発展を願うという立場から天皇と天皇制を問題にしている。そして，天皇個人に対する同胞としての同情から問題を追求しているところがユニークである。

だいたい僕は天皇個人に同情を持っている。（中略）かくそうとしておさえた手は僕の人種としてのそれだった。それは純粋な同胞感覚だった。どうして隠さずにいられたろう。僕は共産党が，天皇個人にたいする人種的同胞感覚をどこまで持っているかせつに知りたいと思う。

もう一つ僕は同情することがある。(中略)つまりあそこには家庭がない。家族もない。どこまで行っても政治的表現としてほかそれがないのだ。ほんとうに気の毒だ。羞恥を失ったものとしてしか行動できぬこと，これが彼らの最大のかなしみだ。個人が絶対に個人としてありえぬ。つまり全体主義が個を純粋に犠牲にした最も純粋な場合だ。どこにおれは神でないと宣言せねばならぬほど蹂躙された個があったろう。（中略）個として彼らを解放せよ。僕は，日本共産党が，天皇で窒息している彼の個にどこまで同情するか，天皇の天皇制からの解放にどれだけ肉感的に同情と責任とを持つか具体的に知りたいと思うのだ。

つづけて引用した主人公のこの二つの言説には，一つのきわだった特徴がみとめられる。すなわち，いずれも，「天皇個人」に対する同情から発している。前のは，天皇が一個の日本人の肉体を持った個人として，外国人の容赦のない視線にさらされるのを見ての「人種的同胞感覚」から生じる同情である。そして後の方は，制度に蹂躙され，マスコミのさらしものになる天皇の個，すなわち天皇制の第一の犠牲が天皇個人にほかならぬという人間的な同情といえよう。つまり，相手を一個の生身の肉体を持って生きている一人の人間としてとらえ，相手に対して自分も個としてかかわって行くという関係において，はじめて「同情」という人間的な感情が生じるのである。そして，そういう個々の人間的な感情を実感することが，倫理確立の土台となる。そういう点からして，この主人公の言説は，本質的に人間・倫理的な視点を含んでいる。

この主人公の言説を一貫するもう一つの特徴は，いずれも日本共産党に対する訴えとして書かれているということである。彼は老中学校長として戦争中自分が心ならずも軍国主義教育の片棒をかつぐことになった責任について自己反省を深めながら，戦後の生徒たちが民主主義を身につけてすこやかに成長して行くことを願い，見守っている。彼の眼の前で，生徒たちのなかの優秀な若者たちが，共産党に同調するようになる。そして，共産党が一貫して掲げてきた「天皇制廃止」の政治綱領にのっかって天皇と天皇制について議論しはじめる。ところが，その若者たちが，天皇と天皇制とを軽く鼻先であしらうようになるにつれ，彼らの精神的な成長に一種の停滞が見られるようになる。そのことが気がかりになって，友人の共産党員にあてて訴えの手紙を書いているのである。つまり，『五勺の酒』を書いた時，作者中野重治自身共産党員であったのだが，日本共産党が戦前から掲げつづけてきた綱領に規定されている天皇制論議がもっぱら歴史的・政治的な視点からのもので，そこに欠落していた人間・倫理的な視点をあらためてその主人公の老中学校長に提起させ，天皇制廃止の問題を日本の民族道徳樹立の根本問題として押し出しているのである。

そこで，第三の歴史・政治的な視点についてふ

りかえってみなければならない。この視点から，日本天皇制の基本的な歴史的政治的な性格を規定し，はじめて「天皇制の廃止」を日本の民主主義革命の第一目標に掲げたのは，1922年の「日本共産党綱領草案」である。それは27年テーゼ(3)の「君主制の廃止」へ引き継がれ，32年テーゼ(4)の「ブルジョア＝地主制の転覆」へと発展させられたものである。これらのテーゼにおいては，もっぱら歴史・政治的な視点から，日本天皇制の基本的な性格が規定され，テーゼとして定式化され，打倒すべき「敵」として設定されている。すなわち，日本天皇制は，地主をはじめとする「寄生的封建的階級」と「急速に富みつつある強欲なブルジョアジー」の双方に立脚し，両者と「堅密な永続的ブロック」を結んだ「絶対君主制」であり，「軍事的＝警察的天皇制」であり，勤労者に対する専制支配と隣接民族に対する掠奪の元凶であると規定されている。ところで，これらのテーゼは，いずれもモスクワのコミンテルンで作成されたものにほかならない。つまり，日本革命を国際共産主義運動の一つの環として位置づける観点から，日本天皇制をとらえたものである。

さて，若き中野重治も，ナップの指導者の一人として，こういう前衛的な歴史・政治的な視点を自己のものとしていた。中野重治の文学作品のなかにそういう視点が突出しているのは，昭和天皇の即位の大典の際に書かれた『雨の降る品川駅』と『鉄の話』においてである。

「改造」の昭和4年2月号に掲載された『雨の降る品川駅』が，天皇制批判の言説として，いかに突出したものであったかは，同じ雑誌の前々号に特集されている佐々木信綱をはじめとする歌人たちの大典奉祝歌や新村出の「御大典奉祝」というエッセイなどと比べてみれば，一目瞭然である。いや，比べてみるまでもなく，『雨の降る品川駅』のなかの天皇に関する言説が，すべて伏字にされていることからして，この詩が当時の天皇制支配下の言語空間を激しく突き破る言説をはらむものであったことを端的に示している。

さらに，この一月後の昭和4年3月号の「戦旗」に発表された小説『鉄の話』には，地主・官僚と結託した天皇制こそ人民の「敵」であるというテーゼが，図式的に主題化されている。主人公は，小作人出身の農民運動の闘士「鉄」青年である。彼は昭和天皇の即位の大典の年に東京に出て来て小作人の息子として少年時代に受けた迫害と屈辱を思い起こし，地主と天皇制に対する報復を激しい言葉で語っている。

ここで，一つのことが思い合わされる。『鉄の話』の主人公鉄は，小学校五年生の時，福井の村で皇太子の行啓をめぐってひどい屈辱と迫害を受けている。『梨の花』の主人公「良平」も，同じ小学校五年生の時，福井の村で皇太子の行啓を体験している。つまり，「鉄」と「良平」とは同級生で，同じ皇太子の行啓を体験していることになる。ところが，両者の皇太子の行啓をとらえる視点についてみるならば，全く対照的になっている。すなわち，「鉄」においては，もっぱら歴史・政治的な視点が図式的に突出しており，「良平」においては，生活・経験的な視点が実感的に深化している。そこに，中野重治が，天皇と天皇制とをとらえて描く際の視点の両極がうかがわれる。

以上見てきた通り，中野重治の天皇と天皇制とにかかわる言説に含まれている視点は，多様で多元的である。時代とともに多様化され，多元化されてきている。基本的には，生活・経験的な視点，人間・倫理的な視点，歴史・政治的な視点の三つが含まれている。

三

さて，中野重治において，これらの三つの視点は，どのように形成され，どのような関係で相互にからみあっているのであろうか。これにかかわって，『甲乙丙丁』の中に興味深い場面が出てくる。敗戦直後，アメリカ占領軍の関係者から，日本の共産主義者が，天皇と天皇制の取扱いについて意見を求められる場面である。

> 吉野，喜美子，田村のあいだに意見の些細なちがいはあった。意見のちがいというよりも，問題取扱いのニュアンスのちがいというべきものだったろう。吉野は天皇制の基本的歴史的政治的性格を問題にしていた。田村はといえば，彼は天皇制および天皇その人の現世的人倫的側面を問題にしていた。

ここで，中野重治が，吉野と田村のあいだの「意見の些細なちがい」――差異にふれていることに注目したい。一方の吉野は，戦争中も獄中にあって非転向を貫いてきた共産党の幹部で，32年テー

ゼにおいて定式化された「ブルジョア＝地主的天皇制の転覆」という観点を，戦後にも継承するという立場から，その「基本的歴史的政治的性格」を問題にしているのである。すなわち，昭和初年代に確立された歴史・政治的な視点の延長線上において天皇制の問題をとらえている。

他方，田村の方は，戦中に転向し，苦渋にみちた戦争体験をなめてきて，戦後に復党することになる作家ということで，明らかに中野重治の分身として設定されている人物であるが，彼が「天皇制および天皇その人の現世的人倫的側面」を問題にしているところが興味深い。すなわち，『甲乙丙丁』の田村は，『五勺の酒』の中学校長と同じく，天皇と天皇制との問題を，人間・倫理的な視点からとらえ直そうとしているのである。そして，吉野との問題のとらえ方の「差異」に気がついているのである。

ところで，吉野と田村との意見の違いは，些細なもので，「意見のちがいというよりも，問題取扱いのニュアンスのちがいというべきものだったろう。」とある。というのは，「天皇制の廃止」という基本点においては，二人は一致していたからである。にもかかわらず，「問題取扱いのニュアンスのちがい」が生じるのはなぜか。言いかえれば，なぜ中野重治は，戦後，『五勺の酒』の校長や『甲乙丙丁』の田村に，天皇・天皇制の問題の取扱いにおける人間・倫理的な視点を提起させなければならなかったのか。

そこで，さきの三つの基本的な視点――生活・経験的な視点，人間・倫理的な視点，歴史・政治的な視点というものの形成発展過程，相互関係について，あらためて考えてみなければなるまい。

まず，昭和初年代の若き中野重治においては，歴史・政治的な視点が先行している。ナップの指導的文学者の一人として，コミンテルン・テーゼの眼鏡を通して，日本天皇制をとらえている。むしろ，そうすることによって，はじめて日本天皇制を打倒すべき「敵」としてはっきり見ることができるようになったのだというべきであろう。そこで，生活・経験的な視点から歴史・政治的な視点への飛躍，それにともなう一種の断絶・空白が生じた。天皇と天皇制の問題を，生活・経験的な視点から眺めることと，それを歴史・政治的な視点からとらえることとの間には，一種の断絶・空白が生じることはさけられない。前者は，天皇と天皇制の問題を，民衆生活の経験と心情に密着して実感的に眺めることはできるが，それを抽象化・観念化して，国家権力の支配構造の頂点に立つ制度としてとらえる次元には進めない。逆に後者は，日本天皇制をヨーロッパのモデルに照らして，「絶対君主制」の日本的特殊型として抽象化・観念化して把握し，打倒すべき対象として客体することができるが，それが性急になればなるほど，前者には見えているものをあえて無視しがちになる。そこで，外来の観念的なテーゼと，日本の民衆の現実生活に根ざす実感や心情との間に，一種の断絶・空白が発生する。そうなると，「ブルジョア＝地主的天皇制の転覆」というテーゼが，いくら輝かしい正しいものであったとしても，それで民衆を動かす力を持つことができない。

中野重治も，昭和十年前後の転向体験のなかでその問題に直面している。「転向」の雪崩現象の引き金となった昭和8年の佐野・鍋山のいわゆる「転向声明」は，当時の日本共産党の最高幹部が，32年テーゼの「ブルジョア＝地主的天皇制の転覆」という綱領を，コミンテルンのおしつけであり，日本固有の国体と民衆の心情を無視したものであるとしてしりぞけ，天皇制擁護の立場に転換したものとして大きな衝撃を与えることになったのである。その衝撃は，生活・経験的な視点と歴史・政治的な視点との間にひそむ断絶・空白を直撃するものにほかならなかった。中野重治自身の転向体験を描いた『村の家』のなかで，父親孫蔵は，転向息子勉次に向かって，「共産党が出来るのは当りまえなこと，しかしたとえレーニンを持ってきても日本の天皇のような魅力を人民に与えることはできぬこと」をさとしている。つまり，中野重治は，自己の転向体験を通じて，それまでもっぱらコミンテルン・テーゼを，金科玉條とする歴史・政治的な視点から日本天皇制をとらえ，その転覆をめざしてきたことが，観念的な性急さとなって足元をすくわれることになった不備を思い知らされたのである。そして日本天皇制の問題を民衆の内部に深く喰い込んでいる問題として，根底からとらえ直すことの必要性に気づいて行ったのである。さらに，戦時下，官憲の保護観察下に置かれた転向者として天皇への忠誠を強制されるという苦渋をなめることで，天皇と天皇制とをめぐる問題について，あらたに眼を開かれることがあったはずである。そういう転向体験，戦争体験を通じ

て，中野重治のなかで，天皇と天皇制とをとらえる視点が，底辺に向かって深化し，多様に分化して行ったのではなかろうか。

そこで，生活・経験的な視点と歴史・政治的な視点との断絶・空白を埋め，両者をつなぐものとして形成されたものが，人間・倫理的な視点であったと考えられる。言いかえれば，「天皇制の廃止」という歴史・政治的な視点からうち出されたテーゼ――外来的で公式的であるがゆえに観念的なスローガンとして上滑りしがちな目標と，内在的な民衆の生活経験や心情との間に通路をつけるための視点として，人間・倫理的な視点が形成されたのである。

そして，中野重治の天皇と天皇制とにかかわる言説においては，これらの三つの視点が，ばらばらに分離しているのではなく，相互補完的にからみあってはたらいている。また，その形成過程も，けっして単純でも，直線的でもない。さきにもふれたが，中野重治が，日本天皇制を日本革命において打倒すべき最大の「敵」として強烈に意識させられたのは，27年テーゼとの出会いによってである。そこで，生活経験や人間倫理を非情に切断し，超越して対象をとらえることのできる歴史・政治的な視点を獲得することで眼から鱗が落ちるような思いをしたにちがいない。そのような若々しい精神のほてりが，『雨の降る品川駅』や『鉄の話』に鮮烈な輝きをあたえることになったのである。しかし，その後の転向体験や戦争体験は，そのような精神の高揚のもろさをしたたかに思い知らせ，底辺へ沈潜することをよぎなくさせたのである。中野重治の天皇と天皇制とにかかわる言説のなかに，人間・倫理的な視点が明確に出てくるようになるのは，戦後になってからである。そして，そういう視点から『五勺の酒』など，天皇と天皇制の問題に鋭くアプローチするユニークな作品が書かれるようになったのである。さらに，その後の『梨の花』などになると，中野重治は，天皇と天皇制とをめぐる問題をとらえる視点を，生活・経験的な視点の方へと掘り下げて行っているのである。

四

作者の視点は，作品の構造や作中人物の視点に反映され，具現されるものである。たとえば，『雨の降る品川駅』や『鉄の話』の作品の構造は，当時の中野重治が，天皇と天皇制とをどのような視点からとらえていたかということを如実に現している。この二つの作品は，昭和3年11月の昭和天皇の即位の大典に当たって，27年テーゼの歴史・政治的な視点から，日本の天皇と天皇制とをはげしく糾弾したものである。詩と小説との違いはあるが，天皇制糾弾という点から見るならば，同一の構造をもって成り立っている。すなわち，どちらも，天皇制権力による朝鮮人や小作人に対する抑圧・迫害，それに対する被抑圧者の反逆，反逆者に対する辺境への追放，追放された反逆者が闘士となって天皇制権力に対す報復のために舞いもどってくるという構造をもって成り立っている。

さて，『雨の降る品川駅』の初出では，天皇に関する言説がすべて伏字にされており，現行のものは大幅に改作されているので，その構造が見えにくくなっているが，『鉄の話』の方は，小説ということもあり，その構造が図式的にあらわになっている。

『鉄の話』は，初出の際には，原題が『鉄の話その一』となっていて，「縄を誰の首にかけるか？」というサブタイトルが付されている。このサブタイトルは，明らかに結末の「縄を誰の首にかけるか？縄を，奴と奴の眷族の首にかけろ！」という文句と呼応して，この一編の主題を明快に打出すように構成されている。

> 俺の兄貴は心臓マヒで死んだ。お袋は首を吊って，親父は老衰で死んだ。しかし俺は「へえさうですか」と引き退るわけには行かなぬ。
>
> 俺は俺達が村を馳り出される糸口となった俺の御前揮毫を思ひ出す。
>
> 郡役所の二階で俺はぶっ倒れた。俺は負けた。だが何時までも負けて居る訳には行かぬ。
>
> 俺は稲葉の甚九郎爺さんのあの怖しい皺枯れ声を思ひ出す。
>
> 「おみねさんは縄を懸ける首を間違へたんじゃ。」
>
> そして，俺は首を間違へる訳に行かぬ。
>
> 縄を誰の首にかけるか？
>
> 縄を，奴と奴の眷族の首にかけろ！

この結末部に一編の主題が集約されている。すなわち，主人公の「報復」の叫びにほかならない。彼の兄貴とお袋と親父とを死に至るまで迫害した

地主と，その背後にひかえている天皇制権力に対する「報復」の叫びである。

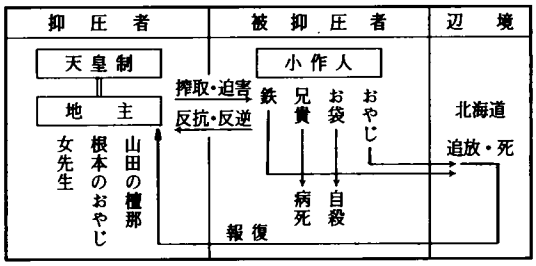
ここで，この叫びをささえている作品の構造がどのように組み立てられているか，少し分析的に見ておきたい。冒頭に，作中の人物たちの関係を示す人物群の顔のスケッチがかかげられている。主人公の小学校五年生の鉄を真中にはさんで，左側に，鉄の「おやじ」，「お袋」，「兄貴」の顔が並んでいる。小作人一家の家族の顔である。そしてその右側には，地主で県会議員の「山田の檀那」とその眷族の顔が並んでいる。

この左右に配置された両グループの敵対的な対立を軸として物語は運ばれる。小作一家は，地主一家によって，ことごとく抑圧され，搾取され，迫害される。その仕打ちにたまりかねて，反抗的な態度に出れば，ますます残虐な仕打ちを加えられる。兄貴は病気で死に，お袋は首を吊って死ぬ。しまいに鉄と父は村を追い出される。鉄たちが村を追放されるいきさつには，天皇制の問題がからんでいる。皇太子の行啓さわぎのなかで，小学五年生の鉄が字がうまいということで，「御前揮毫」を仰せつかる。鉄は，「山田の檀那」と校長につきそわれて，郡役所での「御前揮毫」に臨む。ところが，真面目に練習してきた鉄が，いざ筆をおろそうとして白紙を見ると，前もって「義勇公ニ奉ジ」と「薄い鉛筆の二重文字」が書きこんであって，それをなぞらせるように仕組まれていることに気づく。鉄は，「最劣等のペテン」にかけられる思いで，「極悪の侮辱」を感じて，その場でぶっ倒れる。そのことが，許し難い失態を仕出かしたということになり，「山田の檀那」は県会議員を止め，校長は交迭され，鉄一家は村にいられなくなる。地主は腹いせに鉄一家を村から追い出す。お袋は，首を吊って死ぬ。鉄と父は，北海道の辺境に渡り，父はそこで死ぬ。そのことを通じて，鉄は，地主ばかりではなく，その背後にひかえている天皇制が，一家の仇敵であることに眼を向けるようになる。鉄は，時代の動きのなかで，たくましい闘士に成長して行く。

十五年がただ過ぎる筈はない。

雪がどんなに積らうとも，それを踏んで行ったカンジキの跡は消えぬ。それは峠を越えて山田村一円に渡って居る。それは農村組織者の文字通りの足跡だ。その足跡の網の目はそのまま農村組織の網の目だ。

そういう歴史の発展の中で，鉄も農民運動の闘士の一人となって村に帰り，地主との闘いを組織し，監獄にもたたき込まれるが，天皇の即位の大典のさわぎの年に，東京に出てきて，「縄を，奴と奴の眷族の首にかけろ！」と語るのである。この物語の構造についての分析をまとめてみれば，つぎのような骨子がうかびあがってくる。



このようにまとめてみるならば，この物語の構造が，天皇＝地主ブロック対小作人＝農民階級の間に発生する階級闘争のドラマ――抑圧・迫害と反抗・反逆，追放と報復という二項対立を基本軸として組み立てられていることがわかる。そしてこの構造は，明らかに，地主＝天皇制の転覆という27年テーゼをふまえた歴史・政治的な視点によってささえられているのである。

さて，『雨の降る品川駅』の方についてみるとどうか。この詩の観点と構造について見る場合，昭和4年2月号の「改造」に発表された初出が，現行のものとは大幅に違っているということをまず確認しておく必要がある。詩集に収める際に，大幅に改作され，最終連は半分以上が削除されている。それは，部分的な修正ということにとどまらず，作品の骨格の改変をももたらすものとなっている。

まず，初出形について見ておきたい。

題にそえられている「×××記念に　李北満金浩永におくる」という×××は，「御大典」の三文字が伏字にされたものである。ここをはじめ，作中で天皇にかかわる文字は，すべて伏字にされ，まさに満身創痍という姿で発表されたのである。たとえば第五連はこういうありさまである。

君らは雨に濡れて君らを……を思ひ出す
君らは雨に濡れて……　……　…

…　…　……　を思ひ出す

対照のために，現行の第五連をあげれば，つぎのような二行となっている。

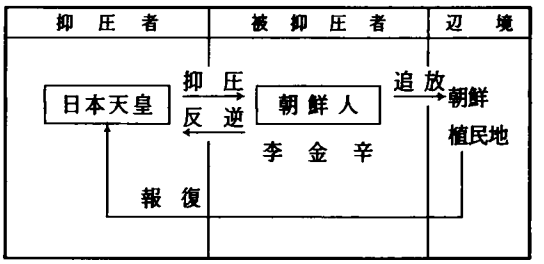
君らは雨にぬれて君らを追う日本天皇を思い出す
君らは雨にぬれて　髪　眼鏡　猫背の彼を思い出す

このように，天皇に関連する文字がすべて伏字にされているので，即位の大典に際し，不穏分子と見なされた朝鮮人たちを日本から朝鮮へ追放するのが「日本天皇」であり，したがって，「君らの反逆する心は別れの一瞬に凍る」というその「反逆する心」に「敵」として映っているのが「日本天皇」であるというこの詩の眼目が抹殺されている。

とくに最終連の伏字がひどい。もとの原稿が失われ，現行のものが初出を半分以上削除して改作されたものとあっては，そこは復元のしようがない。ただ，伏字がひどければひどいほど，そこに激烈な反天皇制の言説が書き連ねられていたにちがいないということは推察できる。そして，そこのところを，『鉄の話』の視点と構造とに照らして解読するならば，そこには，朝鮮に追放された朝鮮人の同志たちが，朝鮮の植民地解放闘争をたたかいぬき，再び日本に舞いもどって，「日本天皇」に対する「報復」をなしとげるという主題が，激しい言葉で歌いあげられていたことがうかがわれる。

そして再び
海峡を躍りこえて舞ひ戻れ
神戸　名古屋を経て東京に入り込み
……に近づき
……にあらわれ
……
……顎を突き上げて保ち
……
……
温もりある……の歓喜のなかに泣き笑へ

最終行の二字の伏字が，「報復」であることは，現行の最終行との対照から明らかである。しかし，その前の6行にわたる伏字の部分は，現行のものから削除されてしまっているので，直接対照して復元するすべはない。ただ，『雨の降る品川駅』と『鉄の話』とが，その視点と構造において同一性をもって成り立っているものであるということに注目するならば，ここの部分で，「日本天皇」に対する激しい「報復」の呼びかけが歌いあげられていたにちがいない。だとするならば，海峡を躍りこえて舞い戻った朝鮮の同志たちは，神戸，名古屋を経て東京に入り込み，目的地の「千代田城に近づき」，「二重橋前にあらわれ」ることになるであろう。そして，鉄が，「縄を，奴と奴の眷族の首にかけろ！」と「報復」を呼びかけていたことと照応して，「奴の顎を突き上げて保ち……」と歌いあげられていたにちがいない。つまり，『雨の降る品川駅』の構造を，その初出形に復元して見るならば，つぎのようなものであったと考えられる。



こうして，『鉄の話』と『雨の降る品川駅』とを対照してみるならば，両者は，作中人物に小作人と朝鮮人という差異はあれ，天皇制のもとにおける抑圧と反逆，追放と報復という二項対立を基軸とする同一の構造をもって成り立っていたことが，明らかになってくる。

ところで，これらの作品を書く前の中野重治は，周知のように大正期の「感情」詩派の流れを汲む抒情詩人として出発していたのだが，なぜ急にこのような天皇と天皇制とに反逆し，それへの「報復」を呼びかける過激な作家へと変身したのであろうか。その急激な転換・変身をうながしたものは，一言でいえば，大正期から昭和期への転換期のドラスチックな激流に彼が身を投じたからにほかならない。少し具体的に言えば，中野重治は，大正15年、東大新人会内の「マルクス主義芸術研究会」のメンバーになって，当時日本共産主義運動の新進の指導理論として，左翼インテリゲンチャ青年の心をつかんでいた福本イズムの洗礼を受け，プロレタリア文学運動に進出し，新進気鋭の指導的文学者となり，八面六臂の活動を始めてい

る。そういう中野重治が，モスクワのコミンテルンからもたらされた「日本問題に関する決議」――27年テーゼから強烈な影響を受けることとなったことは疑えない。このテーゼは，当時の日本共産主義運動の二つの潮流であった山川イズムと福本イズムを共に批判し，日本革命の目標として「君主制の廃止」を明確に掲げたものであった。そして，中野重治らが中心となって結成したナップは，この27年テーゼ支持の立場に立って積極的な活動を展開することになったのである。

その活動の一環として，昭和3年11月の昭和天皇の即位の大典の際には，それに対する抗議行動が組織され，そういう時代の激流の中から，『雨の降る品川駅』や『鉄の話』のような作品も生まれたのである。したがって，それらの作品のなかに，27年テーゼによってもたらされた歴史・政治的な視点をもち込み，その視点から，日本天皇制を打倒すべき「敵」としてとらえ，それを激しく糾弾することが，新鮮な使命に思えたとしても不思議ではない。つまり，『雨の降る品川駅』や『鉄の話』のなかに，日本天皇制を撃つ歴史・政治的な視点を据え，それに対する「反逆」と「報復」とを作品構造の中軸に立てることで，中野重治はプロレタリア文学者として，時代の要請に応えて行ったのだと見るべきであろう。

しかし，今日の眼で，『雨の降る品川駅』の初出形や『鉄の話』をふりかえってみるとき，それらの作品に含まれている一種の奇妙な性格が眼についてくる。それは，古い伝統的日本的な心情と新しい外来的革命的な思想とが，性急に結合されているということである。すなわち，『雨の降る品川駅』では，「さようなら」という言葉に込められる古い伝統的な「別れの抒情」と，27年テーゼによってもたらされた反天皇制という新しい思想とが性急に結合されていたのである。そして，初出形には，性急で無理をもかえりみない出産にともなうゆがみ――日本天皇に対する観念的で過激な報復を朝鮮人と一体となって露骨に呼びかけているところなどもともなっていたのである。現行のものでは，そこのところが削除され，整形がほどこされ，「別れの抒情」詩としての純度が高められているが，その分当初にあった視点が後退し，構造もあいまいになっているところがないでもない。また，『鉄の話』では，いわば殺された親兄弟の仇討物語という実に日本的で古い物語と，地主・天皇制に対する「報復」という新しい政治課題とが強引に結合されているふしがあらわである。そういう異質な要素の性急で強引な結合から生まれた文学作品が，それにもかかわらずなお芸術的な生命をも獲得することができたのは，その結合をうながしたものが，単に外発的な要因によるものではなく，内発的な，中野重治に一貫してそなわっている重要な資質である，迫害される弱者への深い同情というものがつらぬかれていたからにほかならない。

五

中野重治が，天皇と天皇制との問題を，どのような視点からとらえ，いかに描いているかについての考察を進めて行く際に，一つの重要な軸となっているのが，朝鮮問題であるということに注目しなければなるまい。『雨の降る品川駅』については，先に見えてきたところである。ここでは，初期の短篇習作『国旗』と，少年時代を自伝的に描いた戦後の長編『梨の花』をとりあげてみたい。

ごく初期の短編習作『国旗』において，日韓併合の問題をとりあげている背景としては，中野重治の生い立ちにかかわる特別な事情があった。父中野藤作は，重治7歳の明治42年から，15歳の大正6年まで，朝鮮に渡り，総督府の書記として任地をわたり歩いている。母もそれに従い，妹も朝鮮で生まれている。その間，重治自身は両親から離れ，福井の郷里の村の祖父母のもとで育っている。もの心つく頃から，朝鮮に特別の関心を抱くようになったのは当然である。したがって，明治43年の日韓併合という出来事も，むろんその歴史的政治的な意味は分らぬながらも，幼い心を騒がせ，痛める出来事として意識に深く刻み込まれたにちがいない。

そういう特別な事情があったので，第四高等学校の「北辰会雑誌」に掲載した習作『国旗』のなかで，早くも日韓併合の問題を主題にとりあげている。主人公は，夫の任地である朝鮮に渡って来ている日本人の妻である。彼女は，郷里に男の子供を残して来ているので，早く内地に帰りたいと思いながらも，そのことを夫に言い出せないで暮している。そういう設定からして，この作品が，中野自身の少年時代の思い出をふまえたものであることは言うまでもあるまい。

さて，注目すべき点は，そういう日本人の妻の眼

から，日韓併合が，朝鮮人に対する素樸で人間的な同情をもって眺められているということである。

そのうちに突然朝鮮が日本のものになることにきまった。お房はそんな噂を今まで一度も聞いていなかったので驚いた。そして朝鮮人がかわいそうでもあり，また訳もわからず日本人が浅ましくも思われた。

そのように突然の日韓併合に驚き，揺れうごく主人公の眼と心とに，「となりの朝鮮人の小さな家の軒に日の丸がぱたぱたしている」光景が突き刺さってくる。

お房が家の方へ歩いて来たとき，となりの朝鮮人の小さな家の軒に日の丸がぱたぱたしているのを見てびっくりした。なお近づくと，それは何とかいう朝鮮にだけある丈夫はふすまに貼るような紙に赤く丸を描いたものだということもわかった。ちょうどその家の前まで来ると，中から子供（それはかわいい子で，どこか耕一に似かよったところがあるので，これに日本語がよくわかるので，よく内地の話を聞かせたり，いっしょに町へ連れて行ったことなぞもあった。）が出て来たので，

「チョンガ，あれはどうしたの？」と日の丸を指さしながら訊くと，

「奥さん，国旗を出すようにとのことでしたので，きのう紙を置ってきてわたしがかいたのです。」そう言ってチョンガは顔をまっ紅にした。

「そう……」

お房はチョンガの顔を見ながら，今夜こそ切り出そうと思った。

主人公の日本人女性は，親しくしていた朝鮮人の子供が，自分の手で「日の丸」を書いてかかげたと言って「顔をまっ紅」にしている姿を，眼の前に見て絶句している。そして，内地に帰ることを今夜こそ夫に切り出そうと決心しているのである。

むろん，この時，彼女が日韓併合という出来事を歴史・政治的な視点からとらえていたとは考えられない。作者も主人公をそのようには描いていない。彼女は，ただひたすら民衆の一人としての人間的な素樸な感覚から，「朝鮮人がかわいそうでもあり，また訳もわからず日本人が浅ましくも思われた」のである。つまり，これを書いた時の20歳の中野重治は，まだ大正期のヒューマニズムの地平のなかにとどまっていたとみられる。したがって，その人間的な心の窓から，素樸で鋭敏な感性の眼をもって，出来事の核心に迫る光景を見とどけていたとはいえ，その出来事の背後にはたらいていた天皇制国家権力の動きなどをとらえる視点を獲得する以前の素直な習作にとどまっている。その中野重治が，大正から昭和への転換期の激流に身を投じ，「君主制の廃止」，「植民地の解放」というテーゼにみちびかれ，日本天皇制と植民地朝鮮との問題を，歴史・政治的な視点から鋭くとらえて，『雨の降る品川駅』のような詩を歌いあげるプロレタリア詩人へと転換して行ったことは，すでに見てきた通りである。

さて，『梨の花』のなかでは，この日韓併合問題が，主人公良平の視点 ── 生活・経験的な視点から，とらえ直され，詳しく描かれている。日本天皇や皇族の果した役割も浮彫りになるように工夫して描かれている。

良平は，両親たちが朝鮮にいるので，「韓国併合」をめぐる動きにも特別の関心を持ち，それに関する新聞記事なども読んでいる。新聞に，日本の天皇や韓国の皇帝の写真が出ているのを見比べて，「日本の天皇陛下の方が，威厳もあり，智慧もあり，天皇陛下としてこっちの方がいいように思う」などと少年らしい感想もいだく。そして，学校では，校長から，「韓国併合」が天皇陛下の力で，平和のうちに成しとげられたものであるという訓話を聞かされる。

「つまり今度，日本と朝鮮とが一つになった，韓国も日本になった，韓国人も日本人になったということは，日本と韓国とがいくさをして，日本が勝って，そこで韓国を『取った』ということではありませんぞ。これは，日本の天皇陛下と，韓国の皇帝陛下と，王様じゃな，このお二方がようく御相談のうえ，東洋平和のためには，両方の国が一つになるのがいいということになって，そこで，両方あわせて日本ということになった。それですから，みんなは，いくさに勝って，そこで韓国を『取ったんじゃ』と思うたら，とんでもないまちがいになる。わかりますか。わからなあかんぞ……」

しかし，こういう校長の訓話を聞かされて，良平がよく納得がいったということにはならない。「日本の天皇陛下と，韓国の皇帝陛下とが，相談をして日本一つにしたということがよくわからない。」もし，相談して一つになるというのなら，逆に日本が韓国になってもいいわけだし，別の新しい国になることもあり得るはずである。また，校長は，これまで以上に朝鮮人の子供たちと仲良くしなければならないと言うが，村の学校には，朝鮮人の子供はいないのだから，仲良くしようがないじゃないかと思う。ここで，良平は，校長の訓話が嘘だと思って，それに反対したり，否定したりしているわけではない。ただ敏感な少年らしい感性と理性にひっかかってくる些細な異和感・差異にこだわっているのにほかならない。そして，むしろ差異にこだわりつづけることで，さまざまな差異のあわいからさしこんでくる真実の光を求めているのである。

この「韓国併合」について，学校で校長から聞かされた訓話と，家で朝鮮からもどって来た父から聞くうわさ話との間に，重要な差異が含まれていることに良平は気づくのである。

「何せあのときは，さすがの李王もどうしても判をつかんといい出したんじゃそうな。つくといっていたのを，いよいよとなってつかぬと言い出したらしいんじゃね。それで戸をしめ切って，長谷川大将が軍刀を抜いて立ったんだそうだ。そうやっておいて，伊藤さんがそばへ寄って，王さまの手に判を持たして，伊藤さんがそれを持って捺したといんだからね……ひどい話はひどい話なんだ。」

話のそんなところが良平にもわかってくる。日韓合併の時の話だ。朝鮮の王さまが気の毒になる。

こんなふうにして，良平は，校長の訓話を聞かされ，父のうわさ話をもれ聞くことを通じて，差異のあわいからもれてくる事の真実にふれて行く。そして，「朝鮮の王さまが気の毒になる」という同情を通して，自分の心と出来事の核心とを結びつけている。

つまり，主人公良平が，素樸な生活・経験的な視点から，彼につたわって来る出来事・情報のなかに差異を見出し，それを通じて事の真実を浮彫りにして行くというのが，『梨の花』の基本的な方法となっている。「日韓合併」についても，その方法でもって，出来事の真相とそれをめぐって果した日本天皇制の役割とが，おのずから浮彫りになるように描かれている。軍部の力と結託した日本政府によって，暴力的強盗的に事が運ばれ，それが天皇の名において美化され，絶対化される。校長などもその末端の役割をになわされている。そういう天皇制の構造が，「日韓合併」をめぐって浮彫りにされるように，生活・経験的な視点から描かれているというのが，『梨の花』のすぐれた特色となっている。

天皇・天皇制と朝鮮問題という一つの重要な軸に沿って見るならば，『国旗』では，「日の丸」を「国旗」として朝鮮人におしつける日本人のあさましさと，おしつけられる朝鮮人に対する人間的な素樸な同情とが描かれているが，それを日本天皇制の問題と結びつけてとらえる視点はまだない。そして，『雨の降る品川駅』になると，日本天皇が，朝鮮を植民地として支配し，朝鮮人を抑圧し，迫害する抑圧者，したがって朝鮮人同志たちによって「報復」さるべき「敵」であるというとらえ方に突進している。『国旗』と『雨の降る品川駅』との間には，あきらかに一つのまたぎ，性急な飛躍が見られる。それにともなう一種の断絶がある。それを視点の問題に即してみるならば，自然発生的な生活・経験的な視点から，目的意識的な歴史・政治的な視点への転換として見ることができるであろう。

さらに，『梨の花』になると，一度歴史・政治的な視点によって切断され，超剋された生活・経験的な視点が，今度は差異を描くという方法意識と思びついて復活している。けっして，『国旗』的な次元への後もどりではない。あえて言うならば，昭和初年代の戦前の歴史・政治的な視点が昭和十年代の転向体験，戦争体験のなかで，深刻な挫折を経験し，その反省をふまえて戦後に復活し，深まって行ったのが，生活・経験的な視点であり，人間・倫理的な視点であるといえよう。歴史・政治的な視点がなくなったわけではなく，それは抑制され，奥に深く沈潜している。それは，作品の中にむき出しになることなく，作者の構成意識のなかで働いている。それだけに，天皇制の問題も，朝鮮問題も，三つの視点が複合するより奥深い視点から，多面的重層的に描けているのである。

注

(1)江藤淳『昭和の文人』(新潮社，平成元年7月)，の『辛よ，金よ，李よ，……」，「〝村の家〟への裏切り」，「天皇と〝五勺の酒〟Ⅰ，Ⅱ」の章に，中野重治の天皇に対する「裏切り」と「忠誠」の問題が述べられている。

(2)筑摩書房版『中野重治全集』より引用。以下，引用は，断らない限り，この全集による。

(3)『日本問題に関する決議(27年テーゼ)」(『コミンテルン日本共産党テーゼ』世紀書房，昭和26年5月)

(4)「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ(32年テーゼ)」(同前)

(5)「改造」昭和3年12月号には，佐々木信綱，與謝野晶子，尾上柴舟，土屋文明が「御大礼奉祝歌」を寄せている。

Shigeharu Nakano and The Tennō System
——On the Viewpoints and the Structures——

Yukio Kimura

Shigeharu Nakano is a writer who shows us a critical attilude toward the Tennō and the Tennō system. We recognize three viewpoints that approach to the Tennō and the Tennō system. The first is the expperiential viewpoint in *Nashi no Hana*. The second is the moral viewpoint in *Goshaku no Sake*. And the third is the political viewpoint in *Ame no Furu Shinagawaeki* and *Tetsu no Hanashi*.

These viewpoints are nearly connected with the structurs of the works.

This essay tries to elucidate the problem of the Tennō and the Tennō system in the literary expression of Shigeharu Nakano.